

Table 6-4 自尊感情における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数

		感情表出の制御		
		L	M	H
柔軟性	L	76	117	146
	M	94	108	128
	H	165	163	103

第6章

柔軟性が感情表出の制御と 内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響

第6章 柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響

感情表出の制御場面はその反応において、それほど選択肢が多くはない。例えば、「プライドを傷つける友人の言葉に腹が立つ」場面での感情表出を想定した場合、その反応は強弱には違いがあるとしても、その怒りを表すか隠すかのどちらかである。反応の選択肢が少ないだけに、現われた反応が同一である場合でも、同一の反応をした人々の中には違いが内在している可能性が高いと思われる。例えば、友人との関係において感情表出の制御を多く行う生徒の場合、現われた反応としては自分の感情の表出を相当に制御するという形であっても、その反応の出現過程は異なる可能性がある。次のような可能性がある。

1 つは、例えば、プライドを傷つける友人の言葉に腹が立つが、「この場で怒りをむきにして表すことは、相手と自分の関係を悪くする可能性があるから、今は抑えておこう。しかし、今度自分の気持ちが落ち着いたら、自分の気持ちを冷静に話そう」と思う人であり、こういう人は自分の感情を表せないのではなく、表さなかったのである。この人は状況を見て今は話してもいいと判断したら、自分の感情を出せる人である。すなわち、柔軟性がある人で、友達との葛藤が生じそうな場面で感情表出を制御したのである。

もう1つのタイプの人には、対人関係に自信が持てなく、不安や緊張が強い人で、例えば、「自分は好感をもっていたり、嬉しいと思うことに対し、友人が気に入らないと言った」場合、自分が友人と反対の気持ちを表すことに対し、不安を感じ、もし自分の正直な感情を表したら嫌われるのではないかと、相手が不愉快な思いをするのではないかなどを心配して自分の感情を出せないような場合である。後者のような場合、第4章で明らかにされたように、

自尊感情が低く、ストレスやキレ衝動が高く、友人関係の満足感が低いといったような内的・社会的不適応感につながっていくのではないかと思われる。

以上のように、同じく感情表出の制御を多く行う人の中でも、柔軟性が高い人と低い人では、その内的・社会的適応感との関連性も違ってくることが予測される。

そこで、第6章では、柔軟性 (ego-resiliency) を「変化する状況、特にフラストレーションやストレスを感じる場面で、頑固に対処するのではなく、柔軟に反応する傾向」と定義し、柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係性にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

第1節では、CCQの項目から、柔軟性を測定するために質問項目を抽出する。第2節では、柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響について検討する。

第1節 柔軟性を測定するための質問項目の検討 [研究 11-1]

目的

Robin, John, Caspy, Moffitt, & Stouthamer-Loeber (1996)は CCQ (California Child Q-Set) の中から、柔軟性の高い子どもの特徴を最も適切に表す項目と最も適切でない項目の 20 項目を紹介しているが、この内容の中には、生活が充実しているとか、自分に自信をもっているといったように、柔軟性そのものではなく、柔軟性が高いことによって、得られる適応感を表している項目がある。本研究では、柔軟性そのものが、感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響について検討することが目的であり、柔軟性そのものを測定する項目を抽出する必要がある。

そこで、本研究では、柔軟性を測定するための質問項目を検討することにする。

方法

被調査者 東京都公立中学校 4 校 1 年生 238 名 (男子 124 名, 女子 114 名), 2 年生 153 名 (男子 78 名, 女子 75 名), 3 年生 167 名 (男子 93 名, 女子 74 名), 東京都公立高等学校 2 校 1 年生 246 名 (男子 124 名, 女子 122 名), 2 年生 257 名 (男子 125 名, 女子 132 名), 3 年生 290 名 (男子 128 名, 女子 162 名) に対し, ego-resiliency 質問紙が実施された。これらの高校の学力のレベルは「中の上」と思われる。

調査内容

ego-resiliency 質問紙: Block & Block (1980b)が作成した CCQ の 100 項目

から Robin, John, Caspy, Moffitt & Stouthamer-Loeber (1996)が柔軟性の高い子どもの測定に使用している 20 項目に、さらに CCQ の中から 2 項目を選別し、計 22 項目を使用した。

調査方法 各学級で HR の時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

まず、逆転項目は点数を反転させて、得点が高いほど柔軟性が高いように調整を行った。

次に、中学生と高校生を一緒にして柔軟性の 22 項目に対し因子分析を行った。主成分法により因子を抽出したところ、固有値が 1 以上の因子は 5 因子が得られた。これらの因子に対して、バリマックス回転を実施した結果を Table6-1 に示している。それぞれの因子の解釈と命名は以下の通りである。

・第 1 因子：自分への自信、生活の充実、言葉による表現性などに高い負荷を示しており、コンピテンスや主張性を表している項目から構成されているため、「有能感・主張性」と命名する。

・第 2 因子：物事に執着やストレスが多いときの落ち着きなどに高い負荷を示しており、柔軟性と困難な問題に直面したときの感情的落ち着きについての項目から構成されているため、「柔軟性・落ち着き」と命名する。

・第 3 因子：状況をみて行動する能力、慎重、賢明、臨機の才などに高い負荷を示しており、柔軟性と認知的能力についての項目から構成されているため、「柔軟性・賢明」と命名する。

・第 4 因子：根気に高い附加を示しているため、「根気」と命名する。

Table 6-1 適応的な性格に関する質問項目と因子分析結果

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	h^2
15. 私は自分に自信を持っている。	.68	.18	.15	.16	-.03	.55
16. 私の生活はエネルギーで、充実している。	.58	.02	.06	.30	.11	.44
6. 私はユーモアのセンスがある。	.53	.06	.15	.00	-.03	.31
8. 私は前向きである。	.51	.27	.05	.33	.04	.45
11. 私は価値のない人間だと感じる。(R)	.49	.32	.10	.05	.09	.37
5. 私は言葉で表現することが上手だ。	.47	.08	.26	.05	.06	.30
1. 私はシャイである。(R)	.30	.12	-.09	.04	.00	.11
17. 私は困難な問題に直面したり、ストレスを感じる時、 うまく解決できない。(R)	.24	.59	.22	.17	.21	.52
12. 私は物事に縛られやすい方だ。(R)	.28	.56	-.01	.06	.07	.40
18. 私はストレスが多い仕事の時、固まったり同じことを 繰り返してやったりする。(R)	.06	.53	.06	-.01	.15	.31
9. 私はストレスに参ってしまう方だ。(R)	.15	.46	-.08	.12	.29	.34
22. 形にはまった行為や習慣になった行動が多い。(R)	.18	.30	-.10	.04	-.13	.15
19. 私はよく泣く方だ。(R)	-.04	.25	-.04	-.03	.16	.09
3. 私は物事をよく考えて行動する方である。	-.08	.01	.70	.12	.07	.52
10. 私はよく注意集中できるほうである。	.09	-.02	.48	.22	.13	.30
13. 私は賢明な人である。	.34	-.15	.43	.08	.18	.36
21. 私は活動(仕事)をする時、その場に応じて行動でき ると思う。	.37	.17	.40	-.06	.05	.33
2. 私は自分の意志に従って、時には意見を主張し時には 黙って人に従ったりする。	.18	.00	.24	.03	-.03	.09
4. 私は簡単に諦めたりしない。	.17	-.01	.25	.66	-.05	.52
20. ストレスを感じると、諦めたり回避したりする。(R)	.20	.31	.13	.44	.19	.39
7. 私はよくイライラしたり、緊張する方だ。	-.04	.18	.12	-.01	.58	.39
14. 私は気分が変わりやすく、安定していない方だ。(R)	.10	.20	.10	.07	.50	.31
二 乗 和	2.47	1.77	1.44	.99	.91	7.57
寄 与 率 (%)	11.23	8.03	6.53	4.49	4.13	34.42

注) F1は「有能感・主張性」、F2は「柔軟性・落ち着き」、F3は「柔軟性・賢明」、F4は「根気」、F5は「感情の安定」を指す。

・第5因子：イライラや気分の不安性に高い附加を示しており，得点の逆転によって，感情的安定を表すことになるため，「感情の安定」と命名する。

各因子の項目ごとにクロンバックの α の値を求めたところ，第1因子が，.69，第2因子が，.63，第3因子が，.64，第4因子が，.44，第5因子が，.47であった。第4因子と第5因子の数値がやや低い，その他の因子ではある程度の値が得られた。この中で，柔軟性そのものを測定している因子を検討した結果，第2因子と第3因子が柔軟性を測定するために適していると考えられたので，第2因子の6項目と第3因子の5項目，計11項目を柔軟性を測定する項目として選定した。第2因子と第3因子においては，.63以上の α 係の値が得られた (Table6-2)。また，Table6-3に各項目の平均 (SD) とI-T相関が示されている。

Table 6-2 柔軟性(ego-resiliency)の質問項目

項 目
2. 私は自分の意志に従って、時には意見を主張し時には黙って人に従ったりする。
3. 私は物事をよく考えて行動する方である。
9. 私はストレスに参いってしまう方だ。(R)
10. 私はよく注意集中できるほうである。
12. 私は物事に縛られやすい方だ。(R)
13. 私は賢明な人である。
17. 私は困難な問題に直面したり、ストレスを感じる時、うまく解決できない。(R)
18. 私はストレスが多い仕事の時、固まったり同じことを繰り返してやったりする。(R)
19. 私はよく泣く方だ。(R)
21. 私は活動（仕事）をする時、その場に応じて行動できると思う。
22. 形にはまった行為や習慣になった行動が多い。(R)

注) R は反転項目を指す。

Table 6-3 適応的な性格に関する項目の平均 (SD) とI-T相関係数

項 目	平均 (SD)	下位尺度のI-T相関
15. 私は自分に自信を持っている。	3.74 (1.67)	.70
16. 私の生活はエネルギーで、充実している。	3.78 (1.70)	.65
6. 私はユーモアのセンスがある。	3.87 (1.69)	.61
8. 私は前向きである。	4.43 (1.67)	.64
11. 私は価値のない人間だと感じる。(R)	4.56 (1.71)	.59
5. 私は言葉で表現することが上手だ。	3.43 (1.68)	.57
1. 私はシャイである。(R)	3.55 (1.82)	.38

17. 私は困難な問題に直面したり、ストレスを感じる時、うまく解決できない。(R)	3.83 (1.69)	.66
12. 私は物事に縛られやすい方だ。(R)	4.04 (1.70)	.62
18. 私はストレスが多い仕事の時、固まったり同じことを繰り返してやったりする。(R)	4.23 (1.57)	.63
9. 私はストレスに参ってしまう方だ。(R)	4.09 (1.92)	.65
22. 形にはまった行為や習慣になった行動が多い。(R)	3.97 (1.60)	.46
19. 私はよく泣く方だ。(R)	4.68 (1.96)	.53

3. 私は物事をよく考えて行動する方である。	4.30 (1.72)	.71
10. 私はよく注意集中できるほうである。	3.70 (1.61)	.67
13. 私は賢明な人である。	3.70 (1.46)	.61
21. 私は活動(仕事)をする時、その場に応じて行動できると思う。	4.39 (1.47)	.66
2. 私は自分の意志に従って、時には意見を主張し時には黙って人に従ったりする。	5.07 (1.56)	.53

4. 私は簡単に諦めたりしない。	4.65 (1.69)	.80
20. ストレスを感じると、諦めたり回避したりする。(R)	4.15 (1.71)	.80

7. 私はよくイライラしたり、緊張する方だ。	3.78 (1.63)	.78
14. 私は気分が変わりやすく、安定していない方だ。(R)	3.45 (1.80)	.83

第2節 柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響 [研究11-2]

目的

研究4から研究8までの結果により、青年が友人関係において感情表出の制御を多く行うことは自尊感情、ストレス、キレ衝動および友人関係の満足感において望ましくないことが示唆された。

また、研究10では、感情表出の制御を多く行う人は親和欲求が低くシャイネスが高いといったような、あまり人と関わりたがらない人が多いこと、また、感情表出の制御の種類によっては親和欲求とともにシャイネスも高いため、どう対処していいかわからなくなり、相手によい印象を与えようとし相手に合わせてばかりしている人が多いことが明らかにされた。

しかし、感情表出の制御を多く行う人の中には、上述のような人以外に様々なストレスフルな葛藤状況においても柔軟に対処することができ、自分なりの対人スキルが身につけている人、すなわち柔軟性の高い人が、自分の感情を抑えたり、強めたりして表すことは、その場面ではそうした方がいいと思っ
て行っていることが考えられる。すなわち、感情表出ができないのではなく、しないのである。このように「対人関係においてある程度自分を隠したり、偽ったりして表わすことは仕方がないことであり、また適切な場面を選んで自分の気持ちを表現すればいい」と柔軟に考えることができる人は、感情表出の制御を多く行うとしても、精神的健康や友人関係の満足感にそれほど大きなダメージを与えないことが考えられる。

そこで、本研究では柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響について検討する。

なお、研究3から10までは感情表出の制御の5つの下位尺度別に分析を行ってきたが、本研究では、感情表出の制御を多く行う人と内的・社会的不適応感との関係に柔軟性がどのような媒介的役割をするかに焦点を合わせており、内的・社会的適応感のほとんどの変数（自尊感情、ストレス、キレ衝動、自我同一性、友人関係の満足感）において、下位尺度間で類似な動きを見せていることもあり、下位尺度別に分析することはしない。ただし、充実感については、下位尺度によって、感情表出の制御と充実感との関係に著しい性差が見られるため、本研究では充実感を除くことにする。以上のように、充実感を除いた自尊感情、ストレス、キレ衝動、友人関係の満足感の4つの変数を内容とする内的・社会的適応感を取り上げ、感情表出の制御とこれらの内的・社会的適応感との関係に柔軟性がどのような役割をするのかを検討することを本研究の目的とする。

方法

被調査者 東京都公立中学校3校 1年生238名（男子124名、女子114名）、2年生153名（男子78名、女子75名）、3年生167名（男子93名、女子74名）、東京都公立高等学校2校 1年生246名（男子124名、女子122名）、2年生257名（男子125名、女子132名）、3年生290名（男子128名、女子162名）に対し、感情表出の制御、ego-resiliency尺度、自尊感情、キレ衝動およびストレス尺度が実施された。また、東京都公立中学校1校 1年生227名（男子109名、女子118名）、2年生168名（男子87名、女子81名）、3年生168名（男子86名、女子82名）、東京都公立高等学校1校 1年生263名（男子127名、女子136名）、2年生194名（男子100名、女子94名）、3年生182名（男子90名、女子92名）に対し、感情表出の制御、

ego-resiliency 尺度, 充実感および友人関係の満足感尺度が実施された。これらの高校の学力のレベルはいずれも「中の上」と思われる。

調査内容

- (a) 感情表出の制御尺度：研究2で作成したものを使用。
- (b) 自尊感情尺度：研究4-2で用いたものを使用。
- (c) ストレス：研究4-2で用いたものを使用。
- (d) キレ衝動尺度：研究4-1で作成したものを使用。
- (e) 友人関係の満足感：研究5で用いたものを使用。
- (f) ego-resiliency 質問紙：研究11-1で抽出したものを使用。

調査方法 各学級でHRの時間または授業時間に一斉に行われた。しかし、一部の学校に対しては、授業時間などの都合で、自宅に持ち帰って次の日に回収するという形で行った。

結果と考察

本研究では柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係にどのような媒介的役割をするのかを検討するため、全部で3つの分析を行った。まず、分析1)と2)は、次のようである。

柔軟性の高群, 中群, 低群ごとに感情表出の制御と内的適応感(自尊感情, 充実感, ストレス, キレ衝動)および社会的適応感(友人関係の満足感)との関係を調べるため、まず、柔軟性の得点の上位1/3, 中位1/3, 下位1/3をそれぞれ高群, 中群, 低群に、また感情表出の制御の得点の上位30%, 中位30%, 下位30%をそれぞれ高群, 中群, 低群として3群に分類した。

まず、柔軟性の高・中・低群の各項目の合計による区分得点は、高群49以上, 中群43以上49未満, 低群43未満である。次に、感情表出の制御のそ

それぞれの因子における高・中・低群の各項目の合計による区分得点は、第1因子（高群19以上，中群18未満14以上，低群14未満），第2因子（高群12以上，中群11未満8以上，低群7未満），第3因子（高群14以上，中群14未満10以上，低群10未満），第4因子（高群12以上，中群11未満8以上，低群8未満），第5因子（高群5以上，中群4未満3以上，低群3未満）である。なお，内的・社会的適応感における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数はTable6-4, 6-5, 6-6, 6-7に示されている通りである。

それから，1) 柔軟性の高群，中群，低群ごとに感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係を検討するために，柔軟性のH群，M群，L群それぞれに対し感情表出の制御の群間の差を求めて1要因分散分析を行った（Table6-8-6-11）。なお，本研究の多重比較には，すべてLSD法が用いられた。2) 感情表出の制御の高群，中群，低群ごとに柔軟性と内的・社会的適応感との関係を検討するために，感情表出の制御のH群，M群，L群のそれぞれに対し柔軟性の群間の差を求めて1要因分散分析を行った（Table6-8-6-11）。

その結果，まず，分析1)の柔軟性の各群ごとに感情表出の制御と内的・社会的適応感との関連について見てみると，自尊感情では，柔軟性の低群（ $F(2,336)=5.34, p<.01$ ），中群（ $F(2,327)=5.50, p<.01$ ），高群（ $F(2,428)=8.16, p<.001$ ）において感情表出の制御差が有意であった。ストレスでは，柔軟性の低群（ $F(2,329)=3.04, p<.05$ ），中群（ $F(2,319)=5.39, p<.01$ ），高群（ $F(2,427)=9.12, p<.001$ ）において感情表出の制御差が有意であった。キレ衝動でも，柔軟性の低群（ $F(2,328)=4.12, p<.05$ ），中群（ $F(2,326)=4.90, p<.01$ ），高群（ $F(2,420)=4.52, p<.05$ ）において感情表出の制御差が有意であった。友人関係では，柔軟性の低群においては有意な感情表出の制御差がみとめられなかった。柔軟性の中群においては感情表出の制御差に有意傾向が見られ（ $F(2,334)=3.01, p<.10$ ），高群においては感情表出の制御差が

Table 6-4 自尊感情における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数

		感情表出の制御		
		L	M	H
柔軟性	L	76	117	146
	M	94	108	128
	H	165	163	103

Table 6.5 ストレスにおける感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数

		感情表出の制御		
		L	M	H
柔軟性	L	74	114	144
	M	89	107	126
	H	165	162	103

Table 6-6 キレ衝動における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数

		感情表出の制御		
		L	M	H
柔軟性	L	73	115	143
	M	91	110	128
	H	160	162	101

Table 6-7 友人関係の満足感における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの被調査者数

		感情表出の制御		
		L	M	H
柔軟性	L	78	87	147
	M	91	108	138
	H	137	105	86

Table 6-8 自尊感情における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの平均(SD)および分散分析の結果

		感情表出の制御			分散分析	
		L	M	H	F値	多重比較
柔軟性	L	27.71 (6.81)	24.51 (6.87)	25.26 (6.71)	5.34 **	(M・H)<L
	M	32.24 (7.07)	29.64 (5.87)	29.69 (6.17)	5.50 **	(M・H)<L
	H	34.58 (6.91)	33.90 (6.49)	31.36 (5.72)	8.16 ***	H<(L・M)
分散分析	F値	25.57 ***	72.30 ***	32.52 ***		
	多重比較	L<(M・H) M<H	L<(M・H) M<H	L<(M・H) M<H		

注) **p<.01, ***p<.001

Table 6-9 ストレスにおける感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの平均(SD)および分散分析の結果

		感情表出の制御			分散分析	
		L	M	H	F値	多重比較
柔軟性	L	32.12 (12.79)	34.78 (11.74)	36.15 (10.44)	3.04 *	L<H
	M	26.01 (12.07)	28.82 (10.64)	31.31 (12.25)	5.39 **	L<H
	H	24.24 (10.50)	23.24 (9.67)	28.86 (12.80)	9.12 ***	(L・M)<H
分散分析	F値	12.12 ***	39.89 ***	12.55 ***		
	多重比較	(H・M)<L	H<(L・M) M<L	(H・M)<L		

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 6-10 キレ衝動における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの平均値 (SD) および分散分析の結果

		感情表出の制御			分散分析	
		L	M	H	F値	多重比較
柔軟性	L	21.67 (8.48)	20.38 (8.61)	23.39 (8.27)	4.12 *	M<H
	M	17.21 (8.39)	17.10 (6.93)	19.92 (8.11)	4.90 **	(L・M)<H
	H	14.91 (6.79)	14.48 (6.67)	17.03 (7.52)	4.52 *	(L・M)<H
分散分析	F値	19.45 ***	21.51 ***	19.06 ***		
	多重比較	H<(L・M)	H<(L・M)	H<(L・M)		
		M<L	M<L	M<L		

注) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 6-11 友人関係の満足感における感情表出の制御・柔軟性の各群ごとの平均 (SD) および分散分析の結果

		感情表出の制御			分散分析	
		L	M	H	F値	多重比較
柔軟性	L	26.84 (6.89)	26.37 (6.88)	25.67 (6.70)	0.81	
	M	29.40 (5.35)	28.25 (5.27)	27.69 (4.97)	3.01 †	H<L
	H	30.66 (6.14)	30.04 (5.86)	28.06 (5.86)	5.11 **	H<(L・M)
分散分析	F値	9.65 ***	9.01 ***	6.05 **		
	多重比較	L<(M・H)	L<(M・H)	L<(M・H)		M<H

注) †p<.10, **p<.01, ***p<.001

有意であった ($F(2,325)=5.31, p<.01$)。

そこで、感情表出の制御差の有意差および有意傾向が見られたところについて、多重比較を行った結果、自尊感情においては、柔軟性の低群と中群において感情表出の制御の低群が中群および高群より自尊感情が高く、柔軟性の高群において感情表出の制御の低群と中群が高群より自尊感情が高いことが示された。すなわち、柔軟性が低い群や中程度の群においては感情表出の制御を多く行う人は無論、中程度行う人も、少なく行う人より自尊感情が低いことが明らかにされた。柔軟性が高い群においては感情表出の制御を中程度行う人も少なく行う人と同様、制御を多く行う人より自尊感情が高いことが示された。次にストレスでは、柔軟性の低群と中群において感情表出の制御の高群が低群よりストレスが高く、柔軟性の高群においては感情表出の制御の高群が低群および中群よりストレスが高いことが示された。キレ衝動では、柔軟性の低群において感情表出の制御の高群が中群よりキレ衝動が高く、柔軟性の中群と高群においては感情表出の制御の高群が低群および中群よりキレ衝動が高いという結果が見られた。最後に友人関係の満足感では、柔軟性の中群において感情表出の制御の低群が高群より友人関係の満足感が高い傾向が見られた。柔軟性の高群においては感情表出の制御の低群と中群が高群より友人関係の満足感が高いことが明らかになった。

以上の結果より、感情表出の制御を多く行うことは、柔軟性が高い場合であっても内的・社会的適応感において望ましくないという結果であった。

次に、分析 2) の感情表出の制御の各群ごとに柔軟性と内的・社会的適応感との関連について見てみると、まず、自尊感情では感情表出の制御の低群 ($F(2,332)=25.57, p<.001$)、中群 ($F(2,374)=32.52, p<.001$)、高群 ($F(2,374)=32.52, p<.001$) において柔軟性の差が有意であった。ストレスでは感情表出の制御の低群 ($F(2,325)=12.12, p<.001$)、中群 ($F(2,380)=39.89,$

$p < .001$), 高群 ($F(2,370)=12.55, p < .001$) において柔軟性の差が有意であった。キレ衝動においても同様に感情表出の制御の低群 ($F(2,321)=19.45, p < .001$), 中群 ($F(2,384)=21.51, p < .001$), 高群 ($F(2,369)=19.09, p < .001$) において柔軟性の差が有意であった。また, 友人関係の満足感においても感情表出の制御のすべての群において柔軟性の有意な差が認められた(低群: ($F(2,303)=9.65, p < .001$)), 中群: ($F(2,297)=9.01, p < .001$), 高群: ($F(2,368)=6.05, p < .01$)。

そこで, 柔軟性の有意な差が見られたところに対し, 多重比較の検定を行った結果, 自尊感情では感情表出の制御のすべての群において, 柔軟性の中群と高群が低群より, また, 高群が中群より自尊感情が高いことが明らかになった。次に, ストレスでは感情表出の制御のすべての群において, 柔軟性の低群が高群と中群よりストレスが高いことが明らかになった。キレ衝動では感情表出の制御のすべての群において, 柔軟性の低群と中群が高群よりキレ衝動が高いこと, また低群が中群よりキレ衝動が高いことが明らかになった。友人関係の満足感では感情表出の制御のすべての群において, 柔軟性の中群と高群が低群より友人関係の満足感が高いことが示された。すなわち, 感情表出の制御のすべての群において柔軟性の高い群が低い群より内的・社会的適応感が高いという結果であった。

分析 1) と 2) の結果から, 感情表出の制御と柔軟性の両方とも内的・社会的適応感において重要な要因であり, 感情表出の制御を多く行い, 柔軟性が低い人は内的・社会的適応感において最も望ましくないということが明らかにされた (Fig.6-1~6-4)。 Fig.6-1~6-4 を見ると, 感情表出の制御を多く行う人の中でも柔軟性の高い人は, 感情表出の制御を少なく行い, 柔軟性の低い人や中ぐらいの人と比べ, 内的・社会的適応感が高い傾向があることが示された。

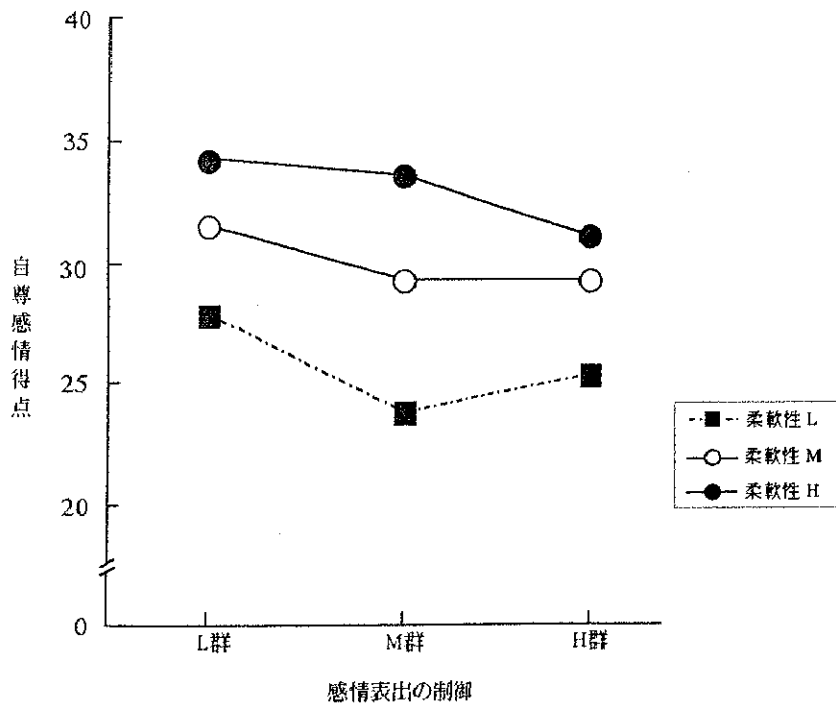


Figure 6-1 感情表出の制御・柔軟性の各群における自尊感情の
平均値

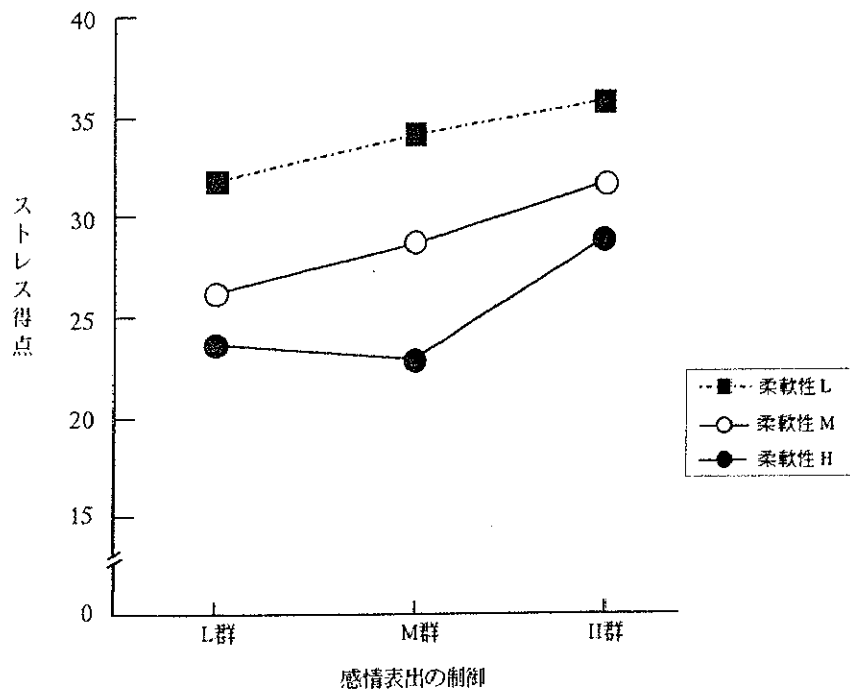


Figure 6-2 感情表出の制御・柔軟性の各群におけるストレスの
平均値

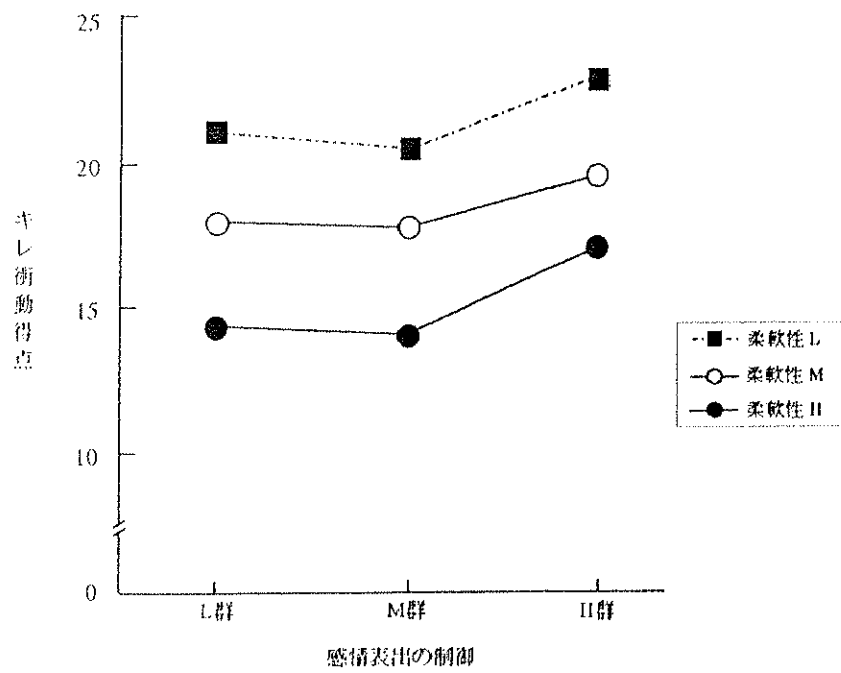


Figure 6-3 感情表出の制御・柔軟性の各群におけるキレ衝動の
平均値

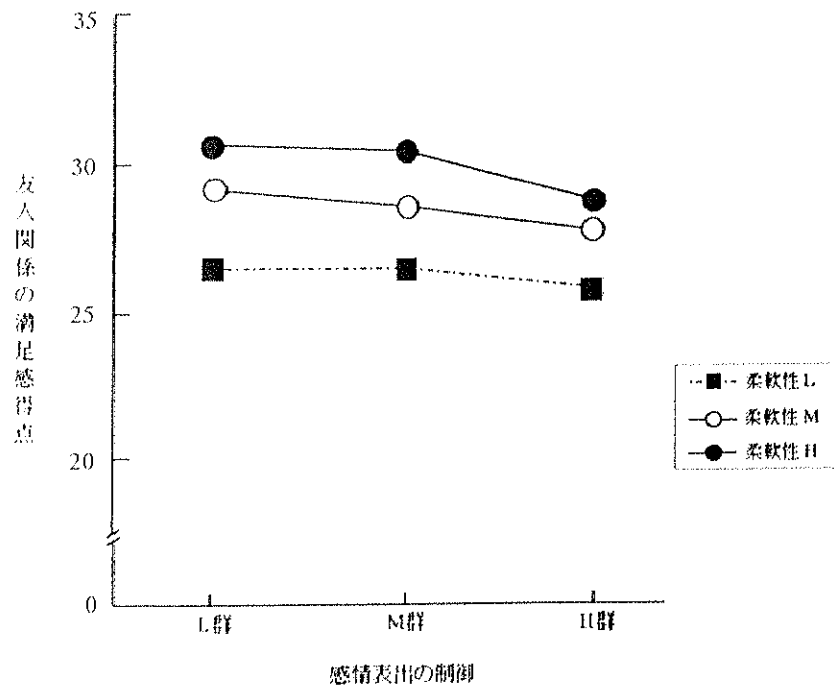


Figure 6-4 感情表出の制御・柔軟性の各群における友人関係の満足感の平均値

そこで、分析 3) で統計的にこの傾向を確かめるために、感情表出の制御の高群、低群および柔軟性の高群、低群の組み合わせによって4つの群を抽出した。なお、内的・社会的適応感における感情表出の制御・柔軟性による4群の被調査者数はTable6-12に示されている通りである。次に、内的・社会的適応感におけるこの4群の差を求めて1要因分散分析を行った。その結果、自尊感情 ($F(3,486)=56.06, p<.001$)、ストレス ($F(3,482)=29.36, p<.001$)、キレ衝動 ($F(3,473)=35.82, p<.001$) および友人関係の満足感 ($F(3,444)=15.08, p<.001$) において、群の効果が有意であった (Table6-13)。

多重比較の検定の結果、LH 群 (感情表出の制御：低、柔軟性：高) が内的・社会的適応感が最も高く、HL 群 (感情表出の制御：高、柔軟性：低) が最も低いということが示された。また、感情表出の制御を多く行っても柔軟性の高いHH 群 (感情表出の制御：高、柔軟性：高) はHL 群 (感情表出の制御：高、柔軟性：低) やLL 群 (感情表出の制御：低、柔軟性：低) 群より、内的・社会的適応感が高い場合が多かった。

以上の3つの分析の結果を総合的に見てみると、感情表出の制御を多く行う人は感情表出の制御の中・低群の人と比べ内的・社会的適応感が低く、柔軟性が高い人は柔軟性の中・低群の人と比べ内的・社会的適応感が高いということが示された。また、感情表出の制御を多く行う人の中でも物事を状況に合わせて柔軟に考え、対処することができる人は、感情表出の制御を少なく行っていて柔軟性の低い人より、内的・社会的適応感が高い傾向が示された。以上の結果より、感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係において柔軟性は重要な媒介的役割をすることが示唆された。

研究 11 の要約

Table 6-12 適応感における感情表出の制御・柔軟性による4群の被調査者数

	LL	LH	HL	HH
自尊感情	76	165	146	103
ストレス	74	165	144	103
ギレ衝動	73	160	143	101
友人関係の満足感	78	137	147	86

注) LLは感情表出の制御のL群と柔軟性のL群, LHは感情表出の制御のL群と柔軟性のH群, HLは感情表出の制御のH群と柔軟性のL群, HHは感情表出の制御のH群と柔軟性のH群を指す.

Table 6-13 適応感における感情表出の制御・柔軟性による4群の平均(SD)および分散分析の結果

	LL	LH	HL	HH	分散分析	
					F値	多重比較
自尊感情	27.71 (6.81)	34.58 (6.91)	25.26 (6.71)	31.36 (5.72)	56.06 ***	HL<(LL・LH・HH) LL<(LH・HH) HH<LH
ストレス	32.12 (12.79)	24.24 (10.50)	36.15 (10.44)	28.86 (12.80)	29.36 ***	LH<(LL・HL・HH) (LL・HH)<HL
キレ衝動	21.67 (8.48)	14.91 (6.79)	23.39 (8.27)	17.03 (7.52)	35.82 ***	LH<(LL・HL・HH) HH<(LL・HL)
友人関係の満足感	26.84 (6.89)	30.66 (6.14)	25.67 (6.70)	28.06 (5.86)	15.08 ***	HL<(LH・HH) (LL・HH)<LH

注1) LLは感情表出の制御のL群と柔軟性のL群。LHは感情表出の制御のL群と柔軟性のH群。HLは感情表出の制御のH群と柔軟性のL群。HHは感情表出の制御のH群と柔軟性のH群を指す。

2) ***p<.001

研究 11-1 では、研究 11-2 で使用する柔軟性質問紙を作成するために、適応性の高い子どもの特徴から、柔軟性の高い結果として得られる充実感や自信感そして、性格特性の自己主張性などの側面を除いた柔軟性そのものを測定している項目のみを抽出した。研究 11-2 では研究 4 から 8 までで得られた感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に、柔軟性がどのような役割をするのかを検討した。その結果、感情表出の制御を多く行う人の中でも高い柔軟性をもっている人は、柔軟性の低い人と比べて、内的・社会的適応感の得点が高いことが明らかにされた。

第3節 第6章のまとめ

第6章では柔軟性 (ego-resiliency) が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係性にどのような影響を及ぼすのかについて検討することが目的であった。

第1節では、柔軟性を測定するための質問紙を作成するために、CCQの項目から、柔軟性そのものを測定する質問項目を選別するために、適応的な子どもの特徴の22項目に対し、因子分析を実施した。その結果、「柔軟性・落ち着き」に高い因子負荷を示している6項目と「柔軟性・賢明」に高い因子負荷を示している5項目、計11項目の柔軟性の質問項目が作成された。

第2節では、柔軟性が感情表出の制御と内的・社会的適応感との関係に及ぼす影響についての検討を行った。その結果、感情表出の制御を多く行うことと、低い自尊感情、高いストレス状態、高いキレ衝動そして低い友人関係の満足感が密接に関連しているが、感情表出の制御を多く行う人の中で高い柔軟性を持っている人は、そうでない人と比べて、それほど強い内的・社会的不適応感を経験しないことが明らかになった。